



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許し済
©1981 精道教育促進協会(〒00133 三・三四五二 苫屋町船戸町12-6)

教皇様の叢

教区の生命は洗礼

(一九八〇年十二月七日)

洗礼を通して贈られる新しい生命

ヨルダン川のほとりで洗礼者ヨハネは、来たるべきおん方を人々が受け入れられるよう悔い改めの洗礼を授けて、こう言った。「私はあなたたちの悔い改めのために水で洗礼を授けるが、私のあとに来られる方は、私よりも勢力のある方である。私はその方の履物を持つ値打ちさえもない。その方は聖霊と火によってあなたたちに洗礼を授けられる。」(マテオ3・11)

このようにして、ヨハネはヨルダン近辺で説教をし、悔い改めの洗礼を授けながら、次に来たるべき聖霊によるキリストの洗礼を準備したのです。

ヨハネの洗礼にはこの聖霊の力はありませんでした。キリストが制定なさった洗礼、水と聖霊による洗礼のみがその力をもっているのです。このことについて主イエズスは、ある夜ニコデモにおおせになりました。「水と霊によって生まれぬ者は天の国に入れぬ。」(ヨハネ3・5) 秘跡である洗礼によって、キリストの救いのみ業がもたらした実りをあま

すところなく人々に伝えることができるのです。聖パウロが言ったように、「私たちはその死における洗礼によってイエズスと共に葬られた。それは、御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえったように私たちもまた新しい命に歩むためである。」(ローマ書6・3~11参照) この神からの超自然の新しい生命は、天のおん父から人の靈魂への贈り物です。そして人は聖霊を通じてキリストにあづかるものとなるのです。

ですから、ヨルダン川のほとりで洗礼者ヨハネは、救い主のいらっしやることを告げて、言いました。「その方は聖霊と火によってあなたたちに洗礼を授けられる。」(マテオ3・11) この「火」は燃えあがらなければなりません。

罪という悪を、なによりもまず原罪を焼き尽くさなければならぬのです。原罪のために人は神から離れ、神の生命を受けることができなくなった、つまり原罪によって、生命を与える水である神の生命に浸ることができなくなったのです。
栄光に満ちたキリストとの一体化

来たるべき救い主こそ聖霊と火によって洗礼を授けるお方である——このことをわたしたちの集いの第一の話題、みんなで黙想するテーマとしましょう。すべての教区の生命(…)、あなたがたの教区の生命もやはり、洗礼にもといを置いていきます。教区というのは、そういう特殊な共同体であり、神の民の集いなのです。地上の父や母から生まれた新しい人々が、水と聖霊によって生まれかわり、そしてキリストの来臨によって主がもたらした与えてくださった新しい生命を受けるところなのです。これは、ベトレヘムの夜のご降誕によって始まり、逾越祭における死と復活によって終わる生命なのです。

第二バチカン公会議において、次のことが思い出されました。「洗礼の秘跡によって人は真に、はりつけにされ、栄光を受けたキリストと同化します。そして神聖な生命へと生まれかわるのです。使徒が言ったように『あなたたちは、洗礼の時キリストと共に葬られ、洗礼の時キリストを死者の中からよみがえらせた神の力への信仰によってまたキリストと共によみがえった。』(コロサイ書2・12)」

洗礼の秘跡によって

人は、

真に、はりつけにされ、

栄光を受けたキリストと

同化する。

このように、キリスト信者の実際の生活は洗礼から始まります。神の民の共同体としての教区の生命も、常に洗礼によって新たに始まり、洗礼のたびにこの共同体は救い主なる

神の子の遺産となります。教区における洗礼の秘跡によってわたしたち一人ひとり神の子となるのです。神のおん子が人となって来られたことで、おん父がわたしたちにくださった賜物なのです。そして、それは、洗礼という秘跡のしるし、つまり「印章」によっていっそう強められるのです。

洗礼を祝う

ですからどの教区の生命においても、洗礼についていつも思い出すようにしなければなりません。どういふふうにするにせよ、まず、この教区で授けられる洗礼一つ一つを大切にすることです。洗礼の前にきちんとした準備が必要です。大人の洗礼の場合なら洗礼を受ける人の準備がまず最初にきます。しかしながら子供の洗礼の場合——カトリック信者である私たちなら、これが一番多いでしょうが——その子供の両親や代父母、さらにできればまわりの人々までも、つまり洗礼の秘跡によって子供が新たに生まれ出るその社会の人々全員の準備が必要なのです。

この秘跡をただ伝統的な習慣にしてしまっただけではありません。家庭や、教区の生命にとって一番大切なものを失くした慣習にしてはならないのです。

それだけでなく、幼児洗礼の場合には、その子供が自我に目覚めた瞬間から、すでに受けている洗礼の結果、営むべき信者としての生活に導き入れる義務があるのです。まず両親と代父母にこの義務があります。司牧にあたるものにも責任があります。そして間接的には教区全体の義務となるのです。

系統だった要理教育を与え、秘跡にあずからせることによって、また年齢と環境に合った時と方法で、この責任を果してゆくののです。もっとも大切な要理教育とは、実は日常の家庭生活であり、まわりの環境のすべてなのであります。この日々の家庭生活においてこそ、子供に伝えるべき真理が反映されるべきなのです。

思いやりと愛による

次代の指導者

ダブリン・カトリック青年会議のためのミサにおける説教

(…)あなた方一人ひとりとは主の王国の一員となり、主の救いのみわざに協力するためにキリストから名指しで呼ばれている。これは堅信の秘跡のもつ偉大な真実です。あなたを名ざして呼びだされたあと、使命を果すようにと、神はあなたをおつかわしになります。神が一人ひとりに給うのは預言者イエレミアに語られた次の言葉です。「わたしはおまえとともに在り、おまえをまもる」。神のご加護を保証してくれるものは、あなたの心に吹き込まれた神のみ言葉なのです。詩篇作者によれば、神のみ言葉はあなたにとって足のとしび、道の光なのです。(詩篇119・105) キリストの呼びだしにより、あなたは至福に基礎をおき、あたらしい判断基準、霊的な面から見て新鮮な生活様式に従った新しい生活を送ることになります。キリストご自身のいのちに与っているのですから、たえずキリストに向かいキリストに頼っていかないかがり、充実感と喜びは味わえないでしょう。こころの改心をつねにくりかえしてはじめて、あなたの活動は有益なものとなり、目的を成就することができのです。

理解されることより、理解することよ!

キリスト者としての根本的な呼びだしにどこまでもしたがってゆきたいなら、一瞬一瞬の、一日一日の、一週一週の活動を喜んで忠実に果さなければなりません。あなたがたの大部分の人にとって、活動領域は福音のパン

種を待ち望む世俗の世界であります。あなたたちの曇りない水晶のようにはっきりした仕事は、この世にキリストをもたらしすこと、そしてキリストにこの世をもたらしすことなのです。あなたたちは若い、あなたたちが理解を求めるのは当然で、年長者の、司祭の、愛する親の、そして社会であなたの先輩の世代を形づくる人びとすべての真心からである共感を願っている。ところで、あなたは若く、またキリストの恩寵の生命力を受けているのだから、キリストの使信に対する情熱を分かちもっているならば、理解してもらいたいという気もちよりもはるかに高尚で、はるかに崇高な何かがあることに気づくでしょう。そうすれば「理解されることよりも理解することを、愛されるよりも愛することを」と祈ることができ。あなたがたは思いやりと愛によって次代の指導者となるように召されているのです。

なんのために呼ばれているのでしょうか。たがいを理解するため、ともに働くため、ともに人生の道を歩むため、手をとりあいキリストと共に道を歩むため、全ての人々の人間性を、みずからの尊厳を見失った人々の人間性をも尊ぶため、他人をみてキリストを見つけたければなりません。人々に世界の唯一の希望であらせられるキリストをあてえなければなりません。人生のあらゆる局面において、希望の福音を伝える者となるよう呼ばれているのです。聖ペトロの言うように、「あなたがたのうちにある希望の理由をたずねる」(ペト

口前3・15) 人に対し、答をあたえる準備をととのえておくよう呼ばれているのです。この希望をいただき、思いやりと愛をもってカトリックの信仰の諸原理を身につけていけば、平穏なところで日々の生活の問題に対処することができるでしょう。イエズスの母・聖マリアが(…)仲介のとりなしによっても助けてくださることを確信できることでしょう。

兄弟的献身の必要

複雑な社会問題や経済問題は、たやすく解決できるわけではありません。しかしながら、こうした分野でほんとうの進歩をはかるためには、希望から生まれる忍耐つよさと、同胞の要望に応じる兄弟的献身が欠くことのできない条件なのです。キリスト者としての召しだしが求めるものは、正しく平和な社会をつくりあげるためのあなたがたの貢献なのです。大きなちからを出せるかも知れない、小さなものかも知れませんが、しかしつねに唯一独自の、置き換えの効かないあなたがたの力です。このキリスト者としての呼び出しは同じく一人ひとりが、あるいは揃ってみんなが、救いの福音を大勢の人々の生活にもたらしすようにという招きであり、祈りと犠牲、各自のキリスト教的修練をとおして、また自分の発意と創造にかかると多くの方法をおして実現されるのです。教区は、あなたがたのキリスト教的な生き方を必要としています。社会には、すべての人の利益のためにちからを合わせて働くあなたがたの活力が、喜びが、努力が必要なのです。創造主ご自身でさえ、創造のみわざをつづけるために、あなたがたの協力を求めておられます。日々の仕事は神の目に大きな価値があることを、つねにしっかりと心にとどめておきなさい。仕事はキリストとその弟子にふさわしい中味をもつようできるかぎり努めなさい。次のことも忘れないでくだ

さい。キリストは、労働といのちという贈り物をあなたがたから受け、ついでそれをあなたに捧げたいと望んでおられる。実はいまも、聖体の秘跡においてそのようにしておられるのです。

たえざる改心

すでに述べましたが、たえずキリストに向かいなおし、つねに新たにキリストに帰依しつづければなりません。キリスト信者の生活は、こうしたたえざる改心がなければ完全なものではありませんし、改心はまた、告解の秘跡を欠いてはほんものとは言えません。キリストはあなたがたに会いたがっておられます、定期的に、頻繁に、個人的に、慈悲と救いと治療とによる個人的な出会いにお

**信者の生活は
改心がなければ
完全ではなく、
告解の秘跡を欠く改心は
本物ではない。**

いて。沈んでいるときには支えてやりたい、上へ上へともちあげて、ご自分のみこころに近づきよう引き寄せたいと望んでおられるのです。わたたくしの回勅「人類の救い主」No.20(『教皇様の声』第一号に抄訳があります)で説明しましたように、この秘跡における出会いは、キリストとあなたがた一人ひとりがある権利なものです。そうであってみれば、教皇たるもの、今こう勧めるにあたって、まことに熱心にならざるをえないでしょう。キリストからこの秘跡における権利を奪ってはなりません、そしてあなたがた自身のその権利を絶対に手放してはならないのです。(…)

説教・講話・書簡等の抄訳

あわれみみの御母

復活祭には聖母マリアがザカリヤの妻エリザベトを訪問した際に言った預言的なことを思い出します。「主のおんあわれみは……世々に限りなく」。キリストが地上にお生まれになった瞬間に、このことは救いの歴史に新しい展望を開きました。が、この展望はキリストのご復活の後になって、歴史的にも終末論的にも新たなひろがりを見せてくれます。この時以来、人類という大家族は、あらゆる方面にわたってひろがり、新しい世代が続いてきています。十字架と復活のしるしを身に帯び、キリストの過ぎ越しの奥義に与えられた新しい世代の「神の民」も続いています。この事実は、聖母マリアが親戚の家に行った時「おんあわれみは……世々に限りなく」と神をほめたたえた通り、まさしく主のあわれみのあらわれにほかなりません。

聖母マリアも特殊な、他にまったく例を見ないような方法であわれみを受けました。それだけでなく、さらに独特な仕方です。自分の心を犠牲としてささげて、主が人々におしめしになるあわれみに一致しました。聖母マリアの犠牲はおん子の十字架に堅く結ばれています。カルワリオでは、主の十字架のもとに立っていたからです。聖母マリアの犠牲とは主のあわれみの啓示に他に例を見ないようなかたちで加わったことです。つまり、自分の愛に対する神の全き忠実、永遠の昔より望まれやがて人と民と人類全体とで結ばれた契約に対する神の全き忠実に、聖母マリアは一致したのです。それは十字架を通して最終

的に示された神のあわれみに心をあわせたことでもありません。十字架の神秘、神の超越的な正義と愛の筆舌につくしがたい出会い、聖書にいう「あわれみと正義のくちづけ」を経験した人のなかで、十字架につけられたおん方の母ほどに身近かに強く経験した人はいないのです。母としての心を犠牲とし、決定的な「なれかし」をもって、おん子の死により実現されたカルワリオにおける救いのみわざの神秘的な面を受け入れました。聖母マリアほど深く十字架の神秘を受け入れた人はいないのです。

聖母マリアはだれよりも深く神のあわれみの神秘をごぞんじです。どんなに高い値が払われたか、(つまり、どれほど大きな犠牲であったか)それが、どんなに偉大なことか、よく知っておられるのです。このような理由で聖母マリアは「あわれみのおん母」と称されるのです。「あわれみのおん母」また「神のあわれみのおん母」というこれらの呼び名には、それぞれに深い神学的意味があります。聖母マリアのご靈魂、ご人格全体が特別に準備されたことを表わしているからです。だからこそ、まずイスラエルのこと、それから一人一人の人間のこと、そして人類全体のことなど、色々複雑なできごとを通して、いとも聖なる三位一体の永遠のご計画に従って、人が「世々に限りなく」あずかるであろう神のあわれみを看取することができたのです。

神のおん母に捧げたこれらの呼び名はおもに聖母マリアの特徴を伝えるものです。聖母

は、十字架につけられ復活されたおん方の母として、御あわれみを他に例を見ない仕方でも得た方として、同じく例外的な方法であわれみを受けるにあたいする者とされたのです。ご生涯を通じて、特におん子の十字架のもとで、また、目立たないながらも比類ない方法で、おん子の救いの使命に加わり、それによっておん子キリストがお示しになった愛を人々にもたらすよう召されました。そのキリストの愛は、苦しむ人や貧しい人、自由を奪われた人や目の不自由な人、抑圧された人や罪人に対してとくにはっきりと現われるのです。ちょうど、最初にイエルザレムの神殿で、また洗礼者ヨハネの送った使いの質問に答えた時、キリストがイザヤ預言書のことばを使ってお話しになったように。

実にこの「あわれみ深い」愛こそ、何よりもまず道徳的・肉体的悪に接したときにあらわされたもの、そして十字架にはりつけにされ復活されたおん方の母マリアの心が比類ない特別なかたちで分かちもったものにほかなりません。この愛は聖母マリアのうちに、聖母マリアを通して、教会と人類の歴史のなか

で示しつつつづけられており、格別多岐にわたります。神のおん母において、母のこころやその特有の感受性からでてくる愛であり、また母のあわれみ深い愛をすなおに受け入れる人々にいとも簡単に近づく聖母の特質がそのもととなつていくからなのです。以上はキリスト教のいのちともいうべき偉大な神秘のひとつ、託身の秘義と密接な関係にあります。

第二バチカン公会議でこう述べられています。「恩恵の計画におけるマリアの母としてのこの役割は、お告げのときにマリアが忠実に与え、そして十字架のもとでためらうことなく堅持した同意から始まって、選ばれたすべてのものの永遠の完成に至るまで絶えず続くものである。マリアは天にあげられた後も、これをもたらす務めを放棄せず、かえって数々の取り次ぎによって、われわれに永遠の救いのたまものを得させるために続けている。マリアは、その母性愛から、まだ旅を続けている自分の子の兄弟たち、危険や困難の中にある兄弟たちが、幸福な祖国に到達するまで、配慮し続ける」。聖母は教会で弁護者・扶助者・救済者・仲介者の称号で呼ばれている。

教会には芸術が必要

「像や」絵が必要

教会には芸術が必要である

言うべきことを伝えるための芸術が必要なのです。また、教会は「ことば」も必要とします。神のみことばを証言するための「ことば」、また同時にモダンアートや新聞に見られるような現代人の言語に合う「ことば」も必要としています。そうしなければ、みことばが生き続けることも、人の心を動かすこともできないのです。

教会はキリストやマリア、聖人達の似姿を形どった「像や」絵、彫刻などを必要とする

福音書にはたくさんのおん子の表像やたとえ話を用いられています。そういうものを使うことによって、教えるをわかりやすく説明できますし、

またそうすべきなのです。新約聖書の中でキリストは、神の姿つまり見えない神の姿であると語られています。教会にはただことばだけでなく、秘跡や聖なる印または象徴となるものもあります。ご像やご絵などは「ことば」とともに、いつも救いの知らせを伝えるために使われてきました。元来そうあるべきものなのです。信仰は聞くことによつてのみでなく、見るによつても、つまり人間の基本的感覚である二つの感覚を使って深められるものであるからです。(一九八〇年十月十九日)

不変の教え

キリスト信者の同一性を主張する

私たちは、今、人間が生み出した最良のものが人間の手を離れて、人間に反抗するのを見る苦悩が不安をかもし出している困難な世界に生きている。しかし、このような世界にあって、要理教育は、キリスト信者が自分に喜びを覚え、他人に奉仕するために、世の光の塩となるのを助ける必要がある。無論、そのためには、キリスト信者が要理教育によって、その同一性を強められ、要理教育そのものも、あちこちに見られるようなためらいとあいまいさと愚かさから遠ざかる必要がある。私は、それぞれが信仰に対する挑戦であるほかの難問の中の幾つかを指摘して、要理教育をそれを克服する一助にしたい。

無関心

(一)すべての人に「救いのための対話」の機会を与えるためには、若者と大人が明確で一貫した信仰を持ち、自分のキリスト教的かつカトリック的の同一性を穏やかに主張し、「見えないものを見、絶対の神を認めて、これを否定する唯物論的文化の中で神について証言できるような教える要理教育が必要である。

特異な信仰教育

全く特異で、変えることのできないキリスト教的同一性は、その結論および条件として、同じような特異な教育学をもっている。今日大きな進歩をとげた多くの魅惑的な人文科学の中で教育学は、たしかに最も重要なものの一つである。この教育学にとって、生物学、心理学、社会学のような他の科学の成果は極めて大きな価値をもっている。教育学および教育法は、これをよりよく調整し、あるいはより効果を上げるために始終論議の対象となっているが、その結果はまちまちである。

ところで、信仰の教育学も存在し、そしてそのような信仰の教育学が要理教育にもたらすことのできる利益については言い過ぎることではない。なぜなら、進歩した正しい教育技

術が信仰の教育学に適用されるのは理に適っている。しかしながら、常に信仰の根本的特徴が考慮される必要がある。実際、信仰の教育学に関する場合、いかに高度なものであるうと、人間的学問が教えられるべきではなく、神の啓示、しかも、その全体が教えられねばならない。ところで、神は自ら全聖史を通して、とくに福音書において、信仰教育が模範としなければならない教育学を用いられた。すべての技術は、信仰を伝え、またその教育に役立つ限り、要理教育にとって有益であり、さもないと一文の価値もない。

探求と信仰の確実性

時には、信仰について考え方のものからより微妙な危険が生まれている。今日、ある神学者の説に、またそれを通して司牧活動に大きな影響を与えていると思われるある現代

「要理教育に関する使徒的勧告」第六回 困難な世界における信仰の喜び

の哲学派は、人間の基本的心性は無限に探求することであって、絶対にその対象をとらえないと強調している。神学に取り入れられたこのような考え方によると、信仰は確実ではなく、疑問であり、証明ではなく、暗黒への飛躍であると言われている。

このような考え方は、信仰が神に関するもの、つまり、希望されていて、まだ所有されず、「鏡の中におぼろに」しか見え、近づきたい光の中に住むかたに関するものであることを想起させるには確かに役立つ。それはまたキリスト教の信仰を固定的な心性としないうで、アブラハムの場合のように、一つの前進と考へさせる。確かでないことを確かなこととして示さないよう注意しなければならぬことは言うまでもない。

しかし、しばしば見られるように、その反

対の極端に走ってはならない。ヘブライ人への書簡には、「信仰は希望されることの保証、見えないものの確信」と言われている。私たちは、それを完全に所有してはなくても、私たちにその保証と証明がある。それで、私たちは、幼児や児童や若者を教育する場合、信仰が絶対の無知、一種の盲目、あるいは闇の世界でもあるかのような全く否定的な概念を示さないで、かえって、信者の謙虚な、そして確信をもった探求が、皆無や錯覚や誤謬や不確実から出発するものではなく、むしろ誤ることも、偽ることもない神の言葉にもとづき、この言葉の不動の岩の上に常に築かれるものであることを彼らに示す必要がある。これは星に従った博士たちの探求である。パスカルは、このような探求を聖アウグスチヌスの考えに従って、「あなたは、す

で私を見出していなかったなら、私を探さないであろう」と書いている。

要理教育の目的も洗礼志願者に、主をよりよく知る助けとなる確実で、簡単で、堅実な事を教えるにある。

要理教育と神学

ここで、要理教育と神学との関係を正しく理解することは極めて重要なことと思われる。この関係は、神学の信仰に奉仕する真の使命について確信をもっているものには極めて明白である。それで、神学の分野におけるすべての動揺が、同時に要理教育の場に反動を引き起こしても怪しむに足りない。ところが、教会では公会議直後から、重要な、しかし危険にみちた神学研究が行われている。聖書釈義学の分野における解釈学についても同じことが言われるべきである。

各大陸から集まったシノドスのある教父たちは、この問題について極めて重大な発言を行った。つまり、神学から要理教育に波及するおそれのある不安定な均衡の危険を指摘し、このような弊害の対策を講ずる必要を強調した。教皇パウロ六世も、その「盛式の信仰宣言」の序文と第二ヴァチカン公会議閉会五周年記念の使徒的勧告の中で、同じように、明確な言葉でこの問題に触れた。

この点については重ねて強調する必要がある。神学者および聖書釈義学者は、自分たちの研究と発言の要理教育への影響を考え、単に憶説あるいは学者間の論争の領域にぞくずることを、確実な真理と受けとられるようなことをしないう、大いに注意する必要がある。要理教師もまた、神学者同様、教導権の指導の下に真の源泉から汲み取り、自分の考察と授業に光を与えるものを神学的研究の分野から集める賢明さを持たなければならない。聖パウロがその司牧的書簡の中でしばしば叱責しているように、変わった説や無用な問題あるいは不毛な議論でもって、要理教育の段階にある青少年の心を混乱させてはならない。

教会が困惑し、不安にかられている現代世界に送ることのできる最も貴重な贈物は、そこで本質的な問題について確信をもち、つまり、ましく自分の信仰に喜びを覚えているキリスト信者を育成することである。要理教育は、このようなことを信者に教えるけれども、それ自身が先にそこから利益を受ける。「単に自分の生活の直接の、部分的な、しばしば皮相な、その上、見掛けの仕方や規則によらないで——自分を深く知ろうと望む人は、自分の不安と疑問、弱さと汚れ、生命と死とともにキリストに近づく必要がある。言わば、全

自己を携えてそのかたの内に入り、自己を再発見するよう、託身と贖いのすべての真理を自分のものにし、吸収しなければならぬ。」(枢機卿 里脇浅次郎訳 中央協議会発行)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 072393